

令和3年度
石川未来プロジェクト事業
成果報告書

はじめに

石川未来プロジェクト事業は、公益社団法人大学コンソーシアム石川の地域連携事業の一環として、今年度より開始された新規事業です。「石川未来プロジェクト」は、大学コンソーシアム石川の特徴を生かして、石川県内の高専、大学、大学院を跨ぎ、専門性を超えた、全国でも珍しい横断型プロジェクトです。また、3年に1回変わる大テーマ（これを「未来テーマ」と呼んでいます）に対する具体的な課題を発見し、その課題に対する解決策を立案し、さらに、それを社会実装する、まさに問題解決型プロジェクトでもあります。

今年度の未来テーマは、「石川県の人口 100 万人。」です。これは、今から約 30 年後の令和 32 年(2050 年)に達成したい石川県の人口を意味しています。現在の石川県の人口は約 112 万人ですが、このままの状態ですと、今から 30 年後には 88 万人になると予想されています。なんと 22%もの人が減少する推計です。さらに高齢者の比率が高まります。人は石川県の貴重な財産です。いかに人口減少を食い止めるか、これが石川の将来に直結します。

少子化は仕方がない、少子化は予測できるから都度対策を打てばよい、一人当たりの生産性を高めれば少子化など問題ない、多様化が進めば少子化は必定である、などと言って問題を全て先送りしているような状況下、その代償を支払わされるのは、今現在の学生達なのであります。

石川県の輝かしい未来を創るのは、現在高等教育機関に所属している学生達を含む若者です。そして、このプロジェクトに 17 名の高邁で勇気ある有志が参加してくれました。

この報告書は、この学生達が約 1 年を掛けて取り組んだ成果をまとめたものです。プロジェクト活動に不慣れな学生達が、自分の考えを述べるだけでなく、追加的意見と建設的批判を交え、ブレインストーミングなどの手法を準用しながらまとめ上げたこの報告書を、是非、ご笑覧賜れば幸いです。

いま、世間はコロナ禍にあって、学生達の潜在能力を十分に発揮しえなかった心残りがありますが、このような厳しい状況下においてもプロジェクトを良い方向に導いてくださったコーディネーターの金沢大学佐川哲也先生、石川県立大学の小椋賢治先生には、心より感謝申し上げます。

公益社団法人
大学コンソーシアム石川
地域連携専門部会
部会長 山岸 邦 彰

目 次

チーム：KoSMOS

社会全体で支える育児の実現に向けて

指導教員 金沢工業大学 教授 山岸邦彰 2

チーム：アートフル

アートが創る石川の未来

指導教員 金沢大学 教授 佐川 哲也 6

チーム：みどりのまち

これからのまちづくり

指導教員 石川県立大学 教授 小椋 賢治10

社会全体で支える育児の実現に向けて

指導教員 金沢工業大学 建築学部 教授 山岸邦彰
参加学生 金沢工業大学工学部情報工学科3年 越井天之輔
石川県立看護大学1年 大野一葉
金沢星稜大学人文学部国際文化学科3年 佐々木彩乃
金沢大学医薬保健学域医学類2年 佐藤大介
石川工業高等専門学校建築学科4年 町田美優

1. 活動の成果要約

未来テーマ「2050年人口100万人」に対して、関連情報を収集し、チームで意見集約を図った結果、子育ての環境の充実が最も重要であるとの結論を得た。若者が子供を産み、育てたいとの考えを持てるよう、子育てに関する学生アルバイトの増進を図るだけでなく、高齢者の雇用・生き甲斐の場として保育施設の支援などを考える。就業先にも育児支援の協力を促し、会議室等における簡易託児施設の開設などを求める。

2. 活動の目的

この活動は、所属、学年、性別を超えた学生が集結し、学生の視点から社会の病巣にメスを入れ、自分たちの社会は自分たちが良くしていく、という強い信念を具現化するプロセスを学習することを一義とする。そして、本活動を通して得られた成果を、大学コンソーシアム石川の協力機関、ならびに県内の有識者やオーソリティに対する成果の具申を行うことにより、学生の社会参画と、活動の実現可能性と限界を経験することにより、学生の自己成長に繋げていくことを目的とする。混成チームであるがゆえに様々な価値観や考え方の衝突や葛藤が生じる中、それらを超える達成感を味わえることも大きな目的の一つである。

3. 活動の内容

・活動の骨子

週に1回程度、会議を行い、理想の社会やその実現に必要な具体策についてディスカッションをおこなった。また、現状調査のためのヒアリングやアンケートを行った。新型コロナウイルスのまん延に伴い、全ての会議やヒアリングを Web 会議システム(zoom)により行った。また、情報は Google Drive™, LINE を用いて共有した。

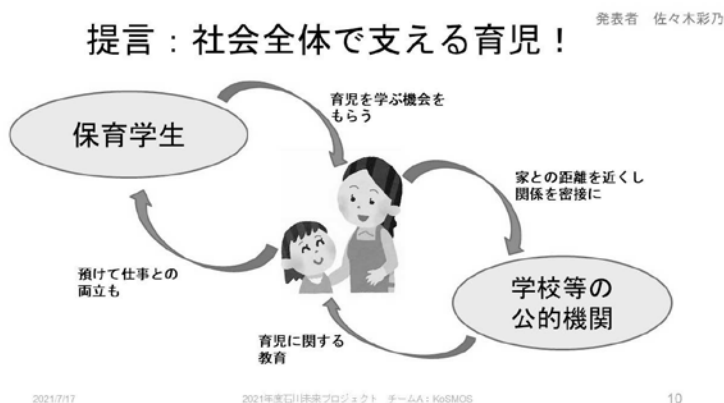
・スケジュール

4月下旬	チーム組成、当チーム名を KoSMOS と命名
5月8日	SDGs セミナーの受講
5月～7月	情報収集活動、収集成果報告、対策案のブレスト、などを週1で実施。
7月17日	中間報告会
8月～9月	具体案の検討
10月	具体的な対策の絞り込み
11月11日	育児サービス企業に対するヒアリングを実施
11月～12月	社会実装を想定したアンケートの作成と実施
1月	成果報告書、成果報告資料等の作成

・主な活動成果を以下にまとめる。

(1) 中間報告資料作成

4月～7月は主に、理想の社会についての意見交換および文献を用いた現状調査を行った。そこから、出生率の低さが人々の育児不安に起因することや育児支援が出生率上昇に強く影響する可能性があることがわかった。育児支援をチームの活動目的として定め、中間報告会に臨んだ。



(2) 育児サービス企業に対するヒアリング

11月11日（木）16:30～17:30において、京都に本社のある育児支援サービス会社「アルファコーポレーション株式会社」様と zoom によるヒアリングを行った。主なヒアリングの内容は以下の通りである。



ヒアリングの様子（2021年11月11日）

質問1 ベビーシッター1名に対して担当できる子供の数について

ベビーシッターは、子供1人に対して1人がつく。例外はあり。全国保育サービス協会の安全配置基準で決まっている。ベビーシッターは全て保育士資格を有しているとは言えない。

質問2 高齢者や学生が託児に参加することについてどのように思うか？

命を預かる仕事であり、どこまで責任が終えるかが問題となる。子供またはその

親との相性がある。高齢者でも可能。学生でも保育士資格を有している人もいる。

質問3 会議室等の簡易託児施設について

会社の中の託児所が流行った時期があった。認可保育所に入りやすくなってからは減った。大規模工場などで臨時的保育園を作っているところは結構あると思われる。

質問4 ベビーシッター等における問題点はあるか？

「保育士不足」、「保育の質」、「信頼の醸成」。社会性を身に付かせるために、保育園や幼稚園に行かせる人が多い。シッターは親の要望に沿うことが仕事。

質問5 保育の機会をより大きくするためには？

公的支援が重要。プロ1名に数名の学生アルバイトという体制で託児をすることも可能かと。

質問6 突然の託児は可能か？

可能な限り対応するが、タイミングによる。シッターならば可能かも。

質問7 保育士になるためのハードルを下げることができないか？

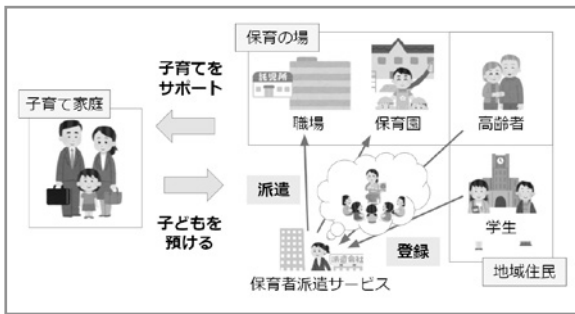
ハードルを下げるよりも受験機会の増加、地域で限定的とするなど、門戸を開いてきている。保育実績に対して資格を与えることも可能ではないか？実際に実技試験の免除がある。

(3) 保育士へのヒアリング

KoSMOSメンバーの大野氏が、知り合いのベビーシッターに対して、学生や高齢者が子育て支援に参加する仕組みに関するヒアリングを実施した。

保育士とのヒアリングの中で、おおまかに分けると学生が保育士の仕事を手伝うことについてどう考えるか、保育士視点から学生、高齢者に任せることが出来る仕事はあるか、またその内容、保育士として1番辛いと思うことについての3点をヒアリングした。1点目については、子供に直接関わることは不安があるという意見であった。学生、高齢者が国家資格を持たない以上責任をどう取るのが問題だという意見であった。2点目について、食事介助などの直接的な保育に関しては国家資格を有する保育士がやるべきだという意見であった。万が一の時に誰が責任を持つのか、どう責任を取るのかという問題があるということだった。反対に清掃、哺乳瓶の消毒といった間接的な保育は参加してもいいのではないかと意見であった。保育業務として関連性の低い分野を学生等がまかなうことで子供との接する時間が伸びることなどが理由で挙げられた。3点目は、親、子との信頼関係を築くことが大変だという話であった。学生や高齢者では子供と短期的な関わりになるため信頼関係を築くのはかなり難しいのではと意見があった。

(4) KoSMOS の考え方



地域ぐるみの育児支援

子育て家庭との近さが育児支援の鍵と考え、左のようなコンセプト図を作成した。具体策として、①地域住民の育児協力、②職場保育の拡張、③保育助手の導入、④保育士派遣サービスの拡張を提案する。

①は地域の高齢者、とくに祖父母の育児協力の推進である。近所、あるいは同じ住居に手すきの祖父母がおり、いつでも彼らを頼れる状態を理想とする。これは、リタイア後の高齢者の役割創出にもなると考えられ

る。②は共働き家庭の日中の子育てのサポートおよび送り迎えの負担減を図り、職場内に託児所を設置する案である。③は保育士のサポーターとして、保育士資格を有しない者が務める「保育助手」なる役割を確立させるというものである。保育士がその専門性を要しない業務に追われている現状を打開し、保育士不足の解消や保育の質向上をねらっている。④は保育の担い手不足を解消するために、地域の高齢者や学生を保育園、託児所、家庭などに派遣するサービスの提供を指す。この案はさらに、学生に育児経験を与えることで若者の育児不安を減らすというねらいも持っている。

(5) アンケートの実施とその結果

現状調査および(4)のニーズ調査のため、大学コンソーシアム石川所属機関の教職員を対象としたアンケートを実施し、212件の回答を得た。主なアンケート結果を以下に記す。

「子供を気軽に、そして常に預けられる身内の人はいましたか？」という質問に対して、およそ9割がいると答えた。預け先の身内の内訳を図1に示した。ここから、現状多くの子育て家庭が実家あるいはその近くに住んでいることがうかがえる。これは、自分あるいは配偶者の親の存在が子育ての大きな助けになると考える人が多いことを示すと考えられる。この結果に基づくと、(4)①はすでにある程度達成されているようであるが、一方で親の近くに暮ら

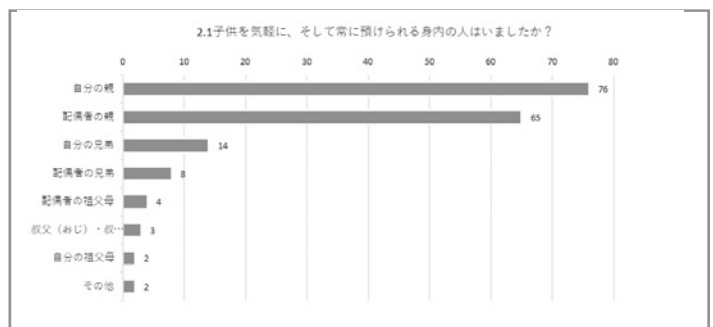


図1

することができないゆえに子供をもつことをあきらめる家庭が存在する可能性も示唆される。

(4)②に関して、「勤め先の会議室の一部に、保育士等が派遣された簡易託児施設がある場合、子供をその施設に預けますか?」という項目を設けた。ここでは、8割から預けるとの回答を得た(図2)。

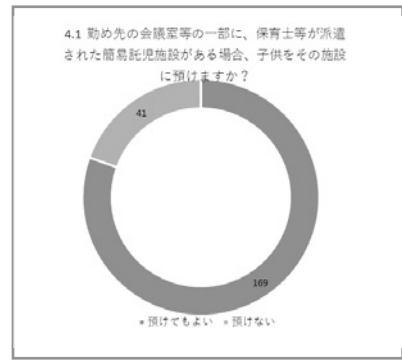


図2

職場内の託児所には、送り迎え負担が少ないことや子供が自分の目の届く範囲にいられることが理由になっていると考えられる。これは、保育園に特に求めるものを問うた項目(図3)にて、保育園までの距離が多数挙げられたことからいえる。ただし、図2の問いに続き、勤め先の簡易託児施設の保育者として勤め先の職員を登用するとした場合に預けるかを問うと、預けるは3割にまで減少した。その理由として、職員の育児に関する技術への不信や職場での人間関係に関わる不安が多数挙がった。

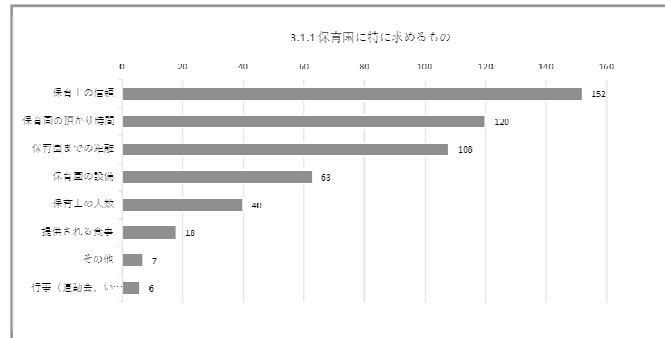


図3

(4)③に関して、「保育士資格を有していないが、おむつ交換、調乳など、平常の子供対応ができる学生や高齢者がアルバイトとして従事している保育園に、自分の子供を預けることに抵抗はありますか?」という項目を設けた。抵抗があるとの回答が46%にもなった(図4)。



図4

抵抗があるとの回答が46%にもなった(図4)。アンケートによるとその理由としては、学生や高齢者を信頼できないことや緊急時対応への不安があるようだった。ここから、③の実現には、アルバイトとしての人材が保護者の信頼を得るための保証が求められているといえる。業務内容や責任の所在の明確化、アルバイトへの育児教育などが学生や高齢者が現場に出る際に必要となるのではないか。

4. 活動の成果

<活動結果のまとめ>

育児支援が人口維持に有効と考え、地域社会全体で支える育児に注目した。ヒアリングやアンケート地域住民の育児協力、職場保育の拡張、保育助手の導入、保育士派遣サービスの拡張をその具体策として提案した。

<本事業の成果>

これから子育てをはじめ社会のあらゆる分野を担う存在が、私たち学生である。その私たちが将来に思いをはせ、その課題解決に挑み、そして大学コンソーシアムやオーソリティと対峙したことによって、今の若者の考えを社会に提示することができた。また、他人事でない近未来と真剣に向き合った学生たちの姿は、そのほか多くの若者の刺激となったと考える。

5. 活動に対するコーディネータからの評価

はじめに、高等教育機関横断型のプロジェクトに応募してくれた学生に敬意を表する。また、コロナ禍の制約の中で、1年を通して困難な課題に自覚をもって取り組んでくれたことを嬉しく思う。Open endの問題に対するアプローチに戸惑ったり、分析が稚拙であったりしたことは否めないが、若手らしい柔軟な発想には心を動かされた。

アートが創る石川の未来

指導教員	金沢大学 人間社会研究域 教授 佐川 哲也
参加学生	岡崎 友哉 金沢工業大学ロボティクス学科 1年
	鈴木 尋 石川工業高等専門学校建築学科 4年
	武田 侑哉 金沢大学理工学域フロンティア工学類 3年
	寺田 恵理 石川県立看護大学 2年
	出口 もも 金沢星稜大学経済学部 3年
	中澤 英樹 北陸大学薬学部 2年

1. 活動の成果要約

チーム「アートフル」は、アートのチカラによって関係人口を拡大し「2050年石川県の人口100万人」を実現する可能性を検討するため、珠洲市が開催した奥能登国際芸術祭開催期間中にフィールドワークを実施して、芸術祭参加者が珠洲市に移住する可能性を検討する調査を実施した。この結果を踏まえて「アートを活かした石川づくり」を検討する一方、若い芸術家が活躍する金沢周辺に芸術作品市場を創出する「芸術の都」創生プランの検討を行った。

2. 活動の目的

アートを活用した人口拡大策を検討するため、次の課題を設定した。

- 珠洲市への移住者を促進するために、奥能登国際芸術祭が果たす効果を明らかにすること
- アートを活かして石川県の魅力を発信し、関係人口拡大と移住促進の可能性を検討すること
- アートの市場性を調査し、アーティストが石川県内に移住・定住する可能性を検討すること
- 将来に向かって継続的に目標を見える化するデジタルコンテンツの活用方策を検討すること

チームのメンバーが互いのプランを尊重しつつも、建設的発展的な視野を持って批判的に意見交換を行い、計画案のブラッシュアップと活動を通じたメンバーの成長を目標とした。

3. 活動の内容

▶活動の概要

Slackを活用してミーティングスケジュールの調整と情報共有を行い、Zoomを活用してオンラインミーティングを行った。また、Jamboardを活用してオンラインワークショップを行い、チームとしてのブレインストーミングによって、アイデア出しとアイデアの整理、活動方針の決定を行った。Google Driveを共有して、作成データの保存と管理を行った。10月に実施したフィールドワークを除いては、すべてオンラインによるミーティングによって検討を行った。メンバー6人のスケジュールが合わず、ミーティングミーティングは午後8時から実施することが多かった。

▶活動記録

- 5月 チームのアクセス方法の確認と自己紹介
- 6月 初回ミーティングとミーティング環境の構築
- 7月 アイデア出しとチーム活動方針の検討、中間報告

- 8月 珠洲フィールドワークに向けた検討
- 9月 珠洲フィールドワークの内容確認と事前準備
- 10月 珠洲フィールドワーク
- 11月 珠洲フィールドワークの分析
- 12月 アートを活用した人口拡大方策の検討
- 1月 最終報告会に向けた資料の作成

▶珠洲フィールドワークの概要

調査日時 10月16日(土) 08:00~17日(日) 18:00

調査対象 奥能登国際芸術祭に会場した10代~80代の男女49名、珠洲に移住した人2名

来場者：道の駅すずなり周辺において質問紙を用いた聞き取り調査を実施

移住者：移住者のオフィス及び作業場において聞き取り調査を実施

市職員：ラポルトすずにおいて移住の状況について聞き取り調査を実施

- 調査内容
- ・所在地/年代/誰と来たか/芸術祭以外の観光先
 - ・芸術祭情報入手先/印象に残ったアート
 - ・珠洲市の印象/移住希望/移住条件

調査結果 有効回答者数 49名

▶珠洲フィールドワーク結果の概要

来場者調査の結果、「移住したい」と回答した人は県内者1名(20代)、県外者4名(10代1名、20代1名、30代2名)であった。移住希望理由は、「空気がきれいで、温泉があるから」などの『豊かな自然環境』や「キリコ祭りが好き」などの『豊かな文化』であった。一方「移住したくない」と回答した人は多数であり、50代が顕著であった。移住したくない理由は『交通』『職場』『インフラ』を指摘した。

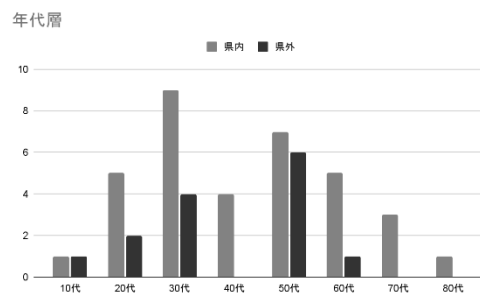


図1 回答者の年代別・県別の特徴

移住者調査では、「珠洲市には自分の求めていたものがあり、魂が震えた」「しばらく珠洲市に滞在して芸術祭のボランティアをしながら、ここで仕事ができるかもしれないと確信した」「珠洲には優れた材料があるが、それを加工する職人がおらず、自分の居場所があると感じた」等を聞き取った。

市職員への聞き取り調査では、2020年度には51人の移住を実現したが、2021年度は9月までの上半期で既に58名が移住しており、珠洲市において転入超過の傾向が認められ、移住人口の急激な増加傾向が確認できる。また、担当者は「芸術祭が移住者増加のきっかけになったことは間違いない」と分析し、「金沢大学との連携でスタートした人材養成プログラムである能登里山里海マイスターをベースとして移住者が少しずつ増加したこと」「芸術祭を通じて金沢美術工芸大学の学生たちとの繋がりが広がったこと」「移住者間のネットワークが拡大して、移住者が移住者を集める現象が起きていること」「珠洲市が掲げる「アート」×「世界農業遺産(GIAHS)」×「SDGs」によって珠洲市の先進性が認められつつあること」「都市の限界を感じて、自然と文化が豊かな地方で暮らすことを求める価値観の変化が生じつつあること」などが重層的に表れてきたと推察している。いずれにしても、珠洲市を含めた能登半島への移住者が確実に増加していることを確認することができた。

▶未来テーマに向けた提案づくり

【アートを活した石川づくり】

奥能登国際芸術祭をはじめとしたイベントを通じ、地域の魅力、特に地元住民と交流を深めてもらうことで関係人口を増加させる。現状「風と緑の音楽祭」や「百万石まつり」、奥能登のキリコ祭りなど、県外在住の人を惹き付けるイベントが数多く開催されている。しかし人口 100 万人を維持するためには、それらのイベントを通じて石川の魅力を知ってもらうことが不可欠である。

珠洲の現地調査では、展示作品を鑑賞するため車で珠洲市内を巡り、美しい海や穏やかな山、美しい田園風景を確認することができた。会場や展示作品を分散させることで、地域の魅力と調和した素晴らしい作品と地域の豊かさを伝えていると感じた。能登半島は、伝統文化の宝庫であり、地域の伝統とコラボした作品を創ることも有効だろう。調査に参加したメンバーの間では、珠洲市の豊かな自然と都市の佇まいのそれ自体が一つの芸術作品のようだと話題になった。

関係人口を生み出すためには、「人のつながり」も重視しなければならない。イベントにただ訪れるだけでなく、地元の人と繋がってもらうことで地域コミュニティの理解が進み、地域への愛着をさらに深めてもらうことが可能である。ひとつの方法として、イベント情報に加え、地元の人と県外の人を繋ぐマッチング機能をもつアプリ開発を提案することが有効だろう。県外者がただイベントに参加するために石川を訪れるのではなく、地元の人と新しい交友関係を築くきっかけになり、人のつながりを生み出すことで、関係人口の増加に繋がるのではないだろうか。

【「芸術の都」創生プラン】

2050 年に人口 100 万人を目指すために、私たちは関係人口の拡大を最初の目標とした。石川県は 2015 年に新幹線が開通し、観光客や知名度が増加した。また石川県には金沢美術大学や 21 世紀美術館、国立工芸館などアートに通じる場所が多く、これらは石川の魅力の 1 つであると考え、アートで関係人口増加に繋げることができると考えた。そこでアートの可能性を検討するため、世界のアート市場と日本のアート市場を比較した。世界のアート市場は約 8 兆円のところ日本のアート市場は 400 億円と、世界と日本とではアートの市場において大きな差があることが分かり、日本のアート市場の成長の可能性を確信した。

私たちは、金沢市近郊を芸術の市場・流通拠点にすることによって、人とお金の流れを作り、関係人口の増加を図ろうと考えた。そこでは 3 か所の市場拠点が中心となる。1 つ目は金沢市内、2 つ目は白山市・野々市市、3 つ目はオンラインである。金沢市内では路線バスが通っている周辺に作品を展示することで、作品を見ながら金沢の魅力を感じてもらうことを目的とする。白山市・野々市市には大型倉庫型店舗を設置し、そこで芸術家の作品を保管・展示することで作品の売買を目的とする。オンラインでは日本の作品を世界へと広げ、日本芸術の発展につなげることを目的とする。このプランでは関係人口の増加だけでなく、芸術家の石川県への移住促進も目的である。上記の 2 つのグラフから国内には 40 万人以上の芸術家がいるが、東京に一極集中していることが分かる。石川県にアートの市場を作ること、公共施設での設置（自治体で仕事を与える）や最低限生活できるほどのクーポン券の支給などといった石川県内の芸術家への支援を行うことにより、芸術家の移住を促すことに繋がると考えた。機械化が進む未来において、五感を刺激する芸術分野はなくなると確信する。そのため石川県内にアート市場である「芸術の都」を創出することで、何年にもわたり、関係人口の増加、芸術家の移住促進を見込むことができると考えた。21 世紀美術館はコロナ禍でありながら令和 2 年に 25 万人もの入館者があった（公益財団法人金沢芸術創造財団令和 2 年度事業報告書, 2020）。石川人口創成ビジョンでは、2050 年の石川県の定住人口を約 98 万人としており、「芸術の都」が定着すれば、

少なくとも2万人の関係人口を見込めるのではないだろうか。関係人口との合計ではあるが2050年には100万人を達成することができる。その後、市場を通して石川県の魅力を発信し、関係人口を定住人口へと変えていくことで、定住人口100万人の達成を目指せると推論した。

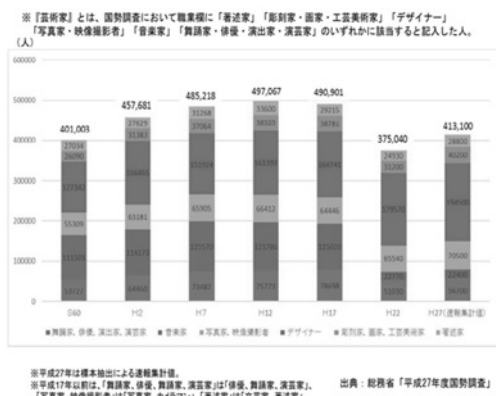


図2我が国の芸術家人口(職業別)

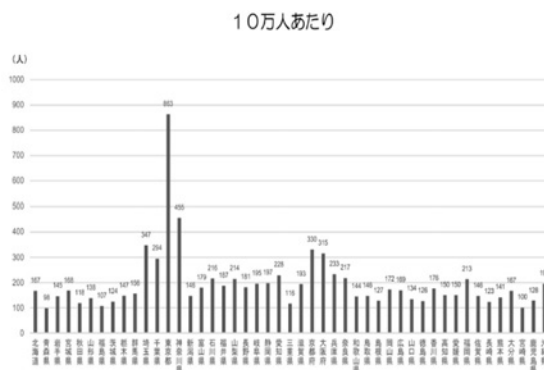


図3我が国の芸術家人口(地域別)

https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/seisaku/15/03/pdf/r1396381_11.pdf より引用

4. 活動の成果

▶取り組みの成果

珠洲フィールドワークを通じて、アートの子カラとアートによる関係人口拡大の可能性について確信した。その結果を踏まえて【アートを活かした石川づくり】【「芸術の都」創生プラン】の2つのプランづくりに取り組んだ。これらの検討から芸術・アートの可能性を改めて確認することができた。

▶未来テーゼへの貢献

アートが「2050年人口100万人」を実現できるかの確証はない。まずは、石川に暮らす私たちが芸術・アートのチカラを確信し、芸術・アートがあふれる地域づくりに取り組めるかにかかっている。その見える化方策として「未来マップ」の可能性に触れたい。未来マップは、個人や企業、地方自治体や地域組織などのあらゆる個人や団体が実現したい未来を描く仮想空間上の未来予想図である。誰もが自由にアクセスできる仮想空間上に「アートの輝く石川」を描き、石川県民と石川を応援する関係人口の全体が、住み続けたい思いを持って、協力して実現を目指す意義と方法を描きたい。

▶今後の課題

この1年の取り組みでは、移住先進地域である珠洲市を訪問し、アートによる石川の魅力発信のチャレンジを体験的に理解できた。しかし、実現可能性の高い計画案を提示することはできなかった。実現には「魅力ある石川の地域資源発掘」と「芸術・アート」のコラボレーションが必要であり、それをどのように起こしていけばよいのか社会実装プランの検討を続けていくことが必要であろう。

5. 活動に対するコーディネータからの評価

「アートフル」と名づけたBチームのチャレンジは、参加メンバーの1つの提案から始まりました。最も印象に残った学修は、リアルで実現した珠洲フィールドワークです。奥能登国際芸術祭の作品に圧倒され、同時に作品を引き立てる珠洲市の美しい風景と「さいはて」の佇まいのハーモニーに感動したことでした。フィールドワークを終えた時、芸術・アートのチカラを信じて、未来テーゼの実現可能性のようなものを感じ取りました。その後は、オンラインという不自由な状況やメンバーが揃わない不安定な状況と戦いながら、メンバーのポテンシャルを発揮して最終発表会までたどり着くことができました。まだまだ拙い提案ながら、明るい未来を描く予想図が描けたと評価しています。

これからのまちづくり

指導教員 石川県立大学 生物資源環境学部 教授 小椋 賢治
参加学生 金城大学 理学療法学専攻 3年 南野 華
石川県立大学 環境専攻 1年 北川 真衣
金沢大学 電子情報工学専攻 3年 鈴見 仁哉
石川工業高等専門学校 建築専攻 4年 泉 雄大
金沢工業大学 機械工学専攻 修士1年 木下 雄介
金沢星稜大学 国際英語論専攻 3年 興津 佑香

令和4年1月22日の「成果報告会」資料を掲載します。



ISHIKAWA

MIDORI NO MACHI



SPORTS



INTERVIEW



WINE



HISTORY



FOODIE



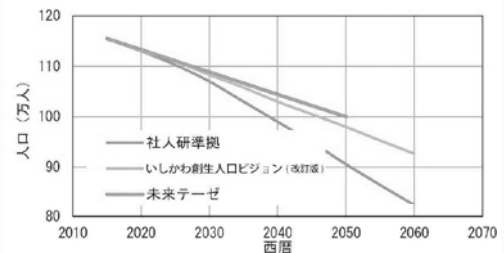
NATURE

ところで、石川未来プロジェクトってなに？

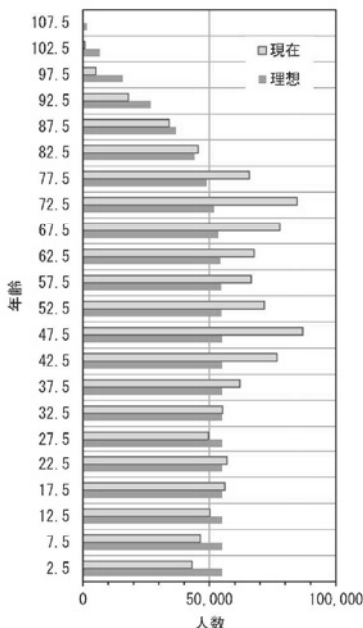
人口減少!?

経済悪化!?

石川未来プロジェクトとは、公益社団法人大学コンソーシアム石川が提示した未来テーマである「人口、100万人。」を達成すべく、石川県内の大学生がチームを組み、1年間活動を行うプロジェクトです。今回わたしたちが大事にしている未来テーマのキーワードは持続可能性です。メンバーの自分たちが最も活躍する2050年に石川県の人口を100万人を維持するための方策は何か？実現できる具体的課題を提案しようといったものです。



◀ 将来の石川県の人口予測



▲ 現在と、100万人を維持した場合の人口ピラミッドの比較

持続可能な社会の実現には、石川県の人口を100万人とする必要があります。現在、石川県の人口は約113万人（令和2年10月1日）です。石川の人口はここ数年減少傾向にあります。子どもや若い人が減り、高齢者が増えてきているということは多くの方がご存じだと思います。しかし、この現状を自分たちの生活にどのような影響があるのだろう、と考えたことはありませんか。3年後の2025年には日本全国で70歳の誕生日を迎える方が約780万人いらっしゃいます。これは北陸三県の人口を足しても届かない人数です。また、今年度の出生数は約84万人でした。増加する高齢者、減少し続ける出生数、このデータを見ると、少子高齢化という漠然とした言葉がより身近な問題だと意識できるのではないのでしょうか。

そこでこのプロジェクトでは、SDGsの考えに基づき、2050年における石川県の人口を100万人にするための具体課題を提案するという活動を1年間行いました。

〈チームの1年の活動〉

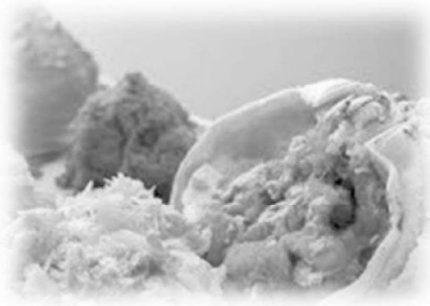
6月：チーム結成 メンバーの考え共有 ブレインストーミング (チームの方針決め)	9月：アンケート内容検討・作成 10月：アンケート配布・結果集計 集計結果より課題点抽出 活動方針の検討
7月：活動の提案 中間発表	11月：雑誌(報告書)作成 駅弁試食会
8月：ワイナリー見学 スポーツコミッションヒアリング Instagram開設	12月：提言への検討 雑誌作成 1月：成果報告会

前書き

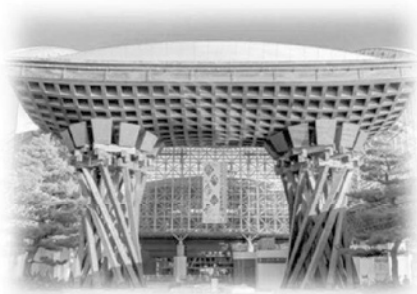
まず始めにこの雑誌を手にとっていただきありがとうございます。本雑誌は公益社団法人大学コンソーシアム石川の運営するプロジェクト「石川未来プロジェクト」に取り組んでいる大学生、チームCの成果物をまとめたものとなっております。学生たちで話し合い、プロジェクト関係者様以外の方でも私たちが調べて感じた石川の魅力について知っていただきたいかったため、このような雑誌形式でまとめる形となりました。ぜひ最後までご覧ください。



▲大学コンソーシアム石川事務局がある
しいのき迎賓館



雑誌 みどりのまち



はじめに

未来プロジェクトについて	03
メンバー紹介	04
アンケート結果	06

特集

石川の食	08
石川の自然	10
石川の歴史	12

ヒアリング調査

ハイディワイナリー	14
金沢スポーツコミッション	16

おわりに

私たちの最終提言	18
----------	-------	----

【名前】南野 華

【学校名】金城大学

【専攻】理学療法学

【趣味】食べること、筋トレ、ドライブ

【好きな食べ物】あんこ

【プロジェクトでやりたいこと】

医療で支える全ての世代が健康で生き生きと暮らせるまちの計画



【名前】北川 真衣

【学校名】石川県立大学

【専攻】環境

【趣味】川や海に行くこと

【好きな食べ物】パン

【プロジェクトでやりたいこと】

安心して暮らせる心地よい街を目指した、環境保全活動を積極的に行うまちの計画



【名前】鈴見 仁哉

【学校名】金沢大学

【専攻】電子情報工学

【趣味】釣り、スノボ

【好きな食べ物】カツカレー

【プロジェクトでやりたいこと】

魅力あふれる石川県をこの先も残していくために自分たちができることの模索



C チーム コーディネーター

【名前】小椋 賢治 教授

【学校名】石川県立大学

【専攻】食品科学科生体分子機能学分野

【趣味】バイク、カフェめぐり

【好きな食べ物】チーズタッカルビ

【プロジェクトでやりたいこと】

メンバーがいきいきと活動するための場づくり

Coordinator



チーム「みどりのまち」

大学も違えば分野も違う？

個性溢れるメンバー紹介！



【名前】泉 雄大

【学校名】石川高専

【専攻】建築

【趣味】食べること

【好きな食べ物】たこ焼き

【プロジェクトでやりたいこと】

街の中のあらゆるところにある障壁を取り除いた
バリアフリーのまちの計画



【名前】木下 雄介

【学校名】金沢工業大学

【専攻】機械工学

【趣味】旅行、登山

【好きな食べ物】ラーメン

【プロジェクトでやりたいこと】

何世代も住み続けられるための地域での婚活
サポートの実現



【名前】興津 佑香

【学校名】金沢星稜大学

【専攻】国際英語論

【趣味】旅行、デジタルアート

【好きな食べ物】お寿司

【プロジェクトでやりたいこと】

世代を問わずあらゆる人にとっていい影響のある、SDG sに基づいた施策の提案



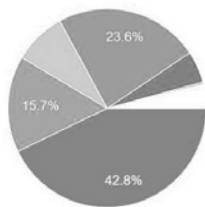
Q3 観光地としての石川の魅力は何だと考えますか
(複数回答可)

①	食 (カフェなども含む)	417票 (68.7%)
②	歴史的建造物	363票 (59.8%)
③	宿泊施設 (温泉街など)	293票 (48.3%)
④	自然	216票 (35.6%)
⑤	アートの発展	158票 (26%)

【アンケート Q3の分析】

「観光地としての石川県の魅力」として、“食”と答えた人が7割近くに迫りました。その一方で、歴史的建造物や宿泊施設、自然、アートなど、他の項目を選択した人も多数います。つまり、石川県には多方向の魅力があると言えます。観光地としての魅力は十分にあり、地元民でも楽しめる県です。実際、コロナ禍で県内観光を楽しんだ人も多いのではないのでしょうか。アンケート2より、石川県に対して交通機関の発達を求めている人が多いことがわかっています。魅力だと思うところに気軽にアクセスできる環境づくりを促進させれば、県民の魅力再発見につながると思います。

Q4 現在石川の人口は減少傾向にあります。県外などからの人口流入施策やその他の施策について、最も関心のあるものを選択してください。

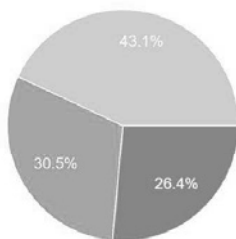


- 日系、外資系企業の誘致
- 外国人労働者の受け入れ
- 地域密着型の婚活アプリ
- 女性向けの支援策 (不妊治療など)
- 県外等からの人口流入施策に反対
- 特になし
- 子育て支援
- 企業誘致による在住者の財政優遇

【アンケート Q4の分析】

「石川県の人口減少対策」として“日系、外資系企業の誘致”に関心がある人がおよそ4割を占めています。他にも、“企業誘致による在住者の財政優遇”や“外国人労働者の受け入れ”など、就職者の確保が人口減少を食い止めると考える人が多いようです。企業を誘致するということは、県外から人を呼び込むということになります。そこで県外からの移住者も住みやすい街づくりを進めることが企業誘致の促進につながると思います。例えば、移住者専用のサイトを作って、困っていることについてアドバイスしあう場を設けるといった対策が挙げられます。

Q5 石川県での就職に希望しますか (学生のみ回答)



- はい
- いいえ
- 迷っている

【アンケート Q5の分析】

石川県での就職を迷っている人が最も多く、約4割を占めています。彼らに対して石川県で就職することの魅力が伝えられれば、石川県での就職者が7割近くになると予想されます。

Q6 石川県に就職してよかったことは何ですか
(社会人のみ回答 複数回答可)

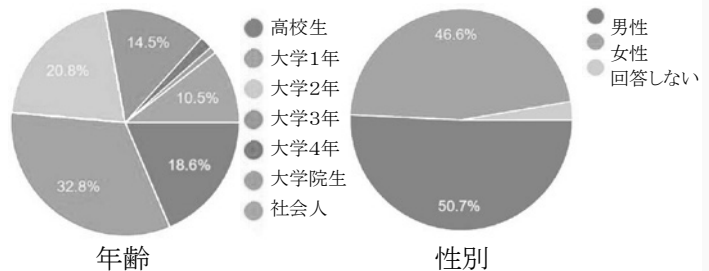
①	実家と近い	58票 (66.7%)
②	自家用車での通勤	41票 (47.1%)
③	生活コストが安い (家賃・食費・インフラ等)	30票 (34.5%)

【アンケート6の分析】

「石川県で就職してよかったこと」として、“実家と近いこと”に次いで、“自家用車での通勤”と答えた人が多く、半数近くに上ります。社会人だけの割合を出すと、実家と近いこと答えた人が64人中49人、つまり7割以上います。このことから、地元で就職する人が少なくとも7割以上いて、県外からの就職者数が少ないことがわかります。自家用車での通勤ができるという利点や生活コストの低さをアピールしていけば、県外からの移住者を増加させることができるのではないのでしょうか。

アンケート結果から紐解く 今の暮らしにナニ必要？

p14～p17で紹介するワイナリーと金沢市役所へのインタビューで、プロジェクト活動のヒントを頂いた私たちは、石川県民の意見を知りたくなり、アンケート調査を行いました。9月の間は、ミーティングを重ねてアンケートの設問を考え、10月に実際に調査を行いました。各メンバーが実際に足を動かし607件の意見を獲得することに成功しました。ご協力いただいたみなさん、本当にありがとうございました。調査を行った年齢や男女比については右の円グラフをご参照ください。



▲アンケート対象者の基本属性

Q1 石川県に住み続けたいと思う理由は何ですか

① 家族（実家がある等）	419票（69%）
② 食べ物	237票（39%）
③ 立地面（災害の頻度・自然・環境）	226票（37.2%）
④ 経済的安定	103票（17%）
⑤ 仕事がある	67票（11%）

Q2 石川県に対して求めていること・困っていることは何ですか （複数回答可）

① 交通機関の充実	373票（61.4%）
② 経済的安定	165票（27.2%）
③ 仕事がある	135票（22.2%）
④ 医療の充実	105票（17.3%）
⑤ 立地面（災害の頻度・自然・環境）	101票（16.6%）

【アンケートQ1の分析】

結果にはっきりと出ていることとしては、約7割の人が、家族が近くに住んでいる（実家が近い）ことに魅力を感じているということです。実際に、大学時代で県外に出た人がUターン就職をして石川県に永住するケースが多く、石川県に親戚が集まっているなどのコミュニティの濃さは魅力の一つなのです。

その次に多かったのが、食べ物がおいしいということです。石川県といえば金沢の近江町市場の海鮮丼のイメージが濃く、お魚がおいしい県だということで全国的に知られています。それだけでなく、ひゃくまん穀などのブランド米や、金時草などの加賀野菜も有名です。

そしてもう一つ取り上げたいことは、立地面の良さです。雨が多く、一年を通じて湿っぽい気候が続く石川県ですが、白山のおかげで地震や津波などの大きな災害が少ないのです。また二つの空港があることや、新幹線が通っているので、旅行に出かけやすくなっているのも、石川県に住み続けたい理由になるのかもしれない。

【アンケートQ2の分析】

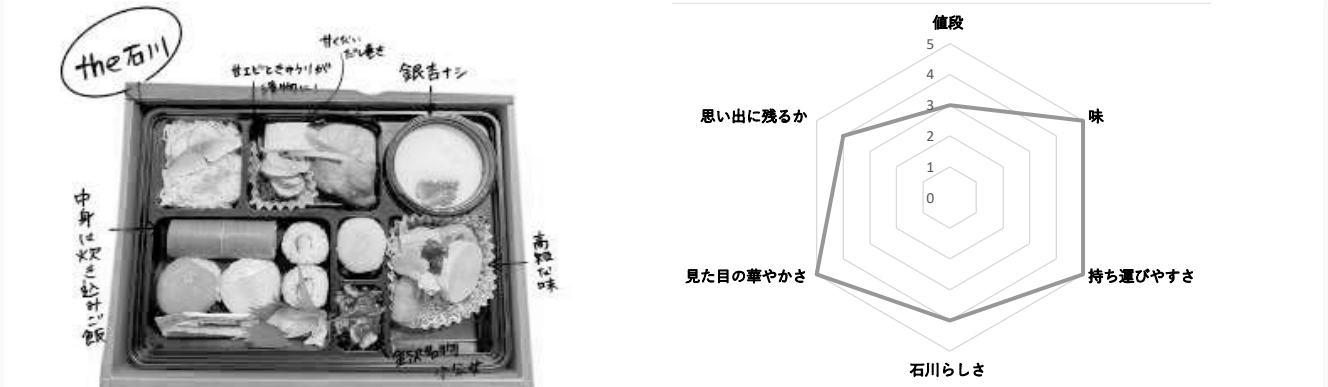
圧倒的に多いのが、交通機関が充実していないことでした。石川県は自家用車で移動する人が圧倒的に多く、逆に自家用車を持っていない人は生活に相当な不便さを感じています。車を持っている人でも、飲みに出かけた時や複数日の旅行に出かけるときに、移動手段に困った経験のある人は多いのではないのでしょうか。

そして次に多かったのは、経済的安定や雇用機会を求める声でした。県の資料を調べて見ると、石川県の労働人口は減少傾向にあり、地域別にみても、金沢に労働力が集中していることが見て取れました。石川県内であっても、地域によって雇用機会や経済安定の差が大きくなってしまっていることが分かりました。

そして子育てのしやすさや医療機関などの充実を求める声も比較的多く挙げられました。アンケート結果をみながら行った話し合いで出た意見に、何世帯にもわたって石川に住み続けている人にとっては子育てや医療に対して満足度が高い一方で、最近石川に住み始めた人にとっては困ることが多いこと、がありました。長期にわたって住み続けることで、子育てや病院への送迎など、近所の人や親戚と協力し合って行えます。その結果、子育てしやすい、医療機関へのアクセスに困らない人がいるのです。一方で、そのコミュニティが築けていない場合には頼る手段が少ないことも事実です。

③芝寿司、「北陸浪漫」

(基本情報： 芝寿司 金沢百番街店 - 弁当製造業者 (business.site))



コメント

石川県民ならだれもが知る芝寿司さんの一番人気なお弁当。The お弁当な、具沢山で食べ応えのあるお弁当です。どの具を食べても繊細な味付けではずれがなく、最後の一口まで楽しめました。王道を求める方、どうせ食べるならいろんな種類が食べたいという方にもってこいの一品です。

共通点
 どのお弁当も比較的小値段が張るものでしたが、どれも石川県の名物を満喫できるものだったので払う価値はあると感じました。石川県らしさを意識して選んだからなのか、私が寿司好きだからなのか、すべて寿司弁当になってしまいました。寿司嫌いの方、申し訳ございません。

～石川県にある絶品料理のお店～

メンバーオススメの

店名：輪島網元とね
 品名：ふぐ天井
 場所：輪島市
 紹介者：小椋賢治

石川県輪島市は天然ふぐの水揚げ量が日本一だそうで、新鮮でおいしいふぐを使った料理を食べられるお店が多いです。まだ新しいお店ですが広くて綺麗で店員さんもフレンドリーで、おいしいふぐの天ぷらをゆっくり味わうことができます。



店名：Bon Appetit
 (ボナペティ)
 場所：金沢市泉野出町
 紹介者：南野華

昼はカフェ、夜はバーになっており、気さくな店主の方とのおしゃべりも楽しいです。オムライスと気まぐれデザートが絶品です！



店名：鶏 SOBA
 スプーンヌードル
 場所：中能登町
 紹介者：興津佑香

素材にこだわった、あっさりラーメンが魅力で、スープも一滴残らず完食でき、オススメです。

2015年3月14日に北

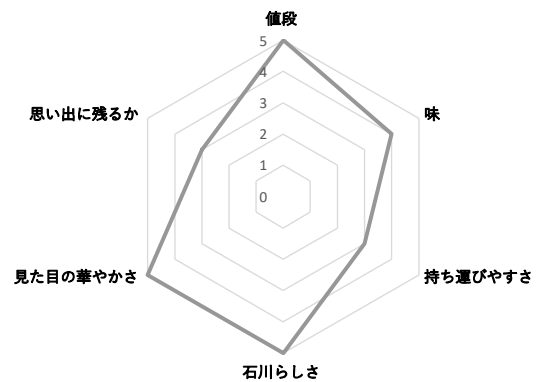
陸新幹線が開業されて以来、金沢への旅行者が多方面から増え、県民から見ても交通の便が良くなったと感じているのではないのでしょうか。その時に起こりがちな、「駅弁何を買ったらいいのかわからない問題」。数時間の移動だからと、適当に選んでしまっていないか？この記事では、金沢百万街あんと内で販売されている駅弁を実際に試食し、私たちの独断と偏見で評価したものを紹介させていただきます。いつか訪れるだろう新幹線での旅行の際に、参考にさせていただけると幸いです。



① ひやくまんぞく亭、「能登牛押し寿司」

(基本情報：

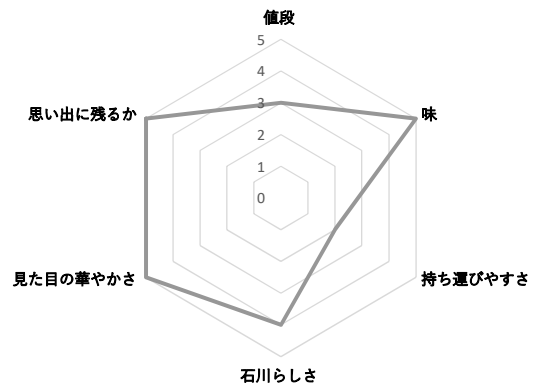
産地がいきいき、を目指して JA 全農いしかわ〜もっと近くに。 || ひやくまんぞく亭 (zennoh.or.jp)



コメント

能登牛×金箔の豪華な見た目で写真映えすること間違いなしです。牛肉は甘めの焼き肉風の味付けで食べ応えばっちりです。能登牛やひやくまんぞくといい石川県の良い食材を使用しているのも、作り置きのお弁当であってもおいしく、押しずしなので型崩れの心配もないので、新幹線内にぴったりのお弁当です。

②みやこや、「香箱ガニちらし」(11,12月限定)



コメント

香箱ガニ漁が11,12月のみ解禁になっているので、期間内しか楽しめない特別感があります。甲羅の味噌はきれいに取り除かれています、カニの身がふわふわしていて、新鮮さを感じますし、カニの身がふんだんに入れられているので豪華です。型崩れしやすく、持ち運びには注意が必要ですが、金沢で香箱ガニを食べそびれた人におすすめです。



「天気の特徴と豆知識」

石川県の天気は、一年を通して雨が多く、楽しみにしていた予定の日ほど天気が崩れてしまう、洗濯物が外に干せない、朝の通勤・通学の空が暗くどんより…、そんなイメージではないでしょうか。今回は石川県の悪天候のなぞに加え、石川県の天気に関連した豆知識についてご紹介します。

まず、石川県は本州の中央部で日本海に面した位置にあり、夏に比べ冬に降水量が多くなります。この冬の降水量が多くなる原因が「季節風」です。季節風とはその名の通り季節によって吹く方向が変化する風を指します。冬に北西から吹く季節風が日本海の湿気を多く含んでおり、石川県に吹きつけることで多くの雪や雨をもたらしています。このような気候である石川県には、「弁当忘れても傘忘れるな」という言葉があります。一年を通して雨が多いだけでなく、天気の日内変動が激しいことも石川県の天気の特徴です。このような言葉が今でも残るほど、石川県の人々の生活は天気に左右されていることがわかりますね。



しかし、この天気よつて「起」る良いこともたくさんあります。日本海側には冬季雷（冬の雷）が多く発生しますが、石川県は雷の発生率が日本一なのです。この冬季雷を別名「鯰起し」といい、おいしい鯰が獲れる初冬に合わせて雷が鳴るため、漁師が網を「起こす」、寝ている鯰を「起こす」との意味をかけた方言です。鯰は石川県民にとって冬の味覚の1つであり、おいしい鯰を食べられることが、石川県の天気のおかげでもあると考えると、これからよりおいしく食べるのができそうですね。

石川県は天候には恵まれていませんが、その天気よつてさまざまな文化や味覚が生まれていることがわかります。あえて悪天候を楽しむ日があってもよいのかもしれないね。

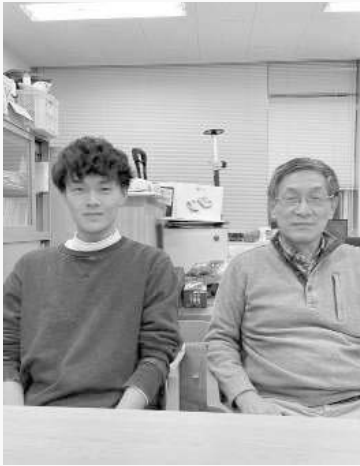
千里浜の侵食問題

主に石川県の千里浜の侵食問題について柳井清治教授、Prakash Thapaさん、蜜澤岳さんの三人にお聞きしました。千里浜は、日本でただ一つの車で走れるビーチです。千里浜なぎさドライブウェイの愛称で地元住民のみならず観光客にも親しまれています。

しかし近年、海面上昇に加え、手取川ダムや金沢港によって海岸侵食が進んでいるとされています。これらのコンクリート構造物は、海に流れ出す土砂量を低下させ、海を漂う砂の流れを遮ってしまうのです。また、のと里山海道の建設によって内陸側から砂の供給が減ったことも原因のひとつとされています。

柳井教授に、侵食問題の解決法について尋ねてみました。すると、「私たちは、環境を改善することで豊かな暮らしを築いてきたが、環境問題が深刻になってきています。私たちの暮らしと自然を両立するためには、将来、技術的に解決する方法を考えてゆく必要があると思います。」とおっしゃっていました。

現在はEco-DRと呼ばれる、生態系を利用して災害を防ぐ、という考え方が注目され始めています。この方法は、生態系を豊かにし、付加的な利益ももたらします。今後、千里浜と私たちの暮らしがより良い関係性を築き上げられることを期待したいですね。



インタビューに協力いただいた柳井教授（右）と蜜澤さん（左）

白山一帯の積雪は春にとけて地滑りを引き起こします。大量の土砂が日本有数の急流河川である手取川を流下していきます。粒が小さい砂ほど日本海沖合に運ばれ、対馬海流のつて能登方面へと移動していきます。



千里浜のごみ問題

主に海洋ごみ問題について楠部孝誠先生にお聞きしました。海洋ごみは、ポイ捨てや発展途上国においてごみの処理技術が未発達であるために発生してしまうようです。

千里浜は羽咋市における観光産業の基盤でもあるため、景観の保護が欠かせません。また、マイクロプラスチック（プラスチックが紫外線を浴びたり外力を受けたたりすることで崩壊し、微小になったもの）が人体に影響を及ぼす可能性も0ではありません。したがって、プラスチックがマイクロプラスチックへと変化する前にごみを撤去する必要があります。海は地球上でつながっており、ごみの排出地域と被害地域が同じとは限りません。そのため、ごみを排出した責任の在りかが不透明であり、ごみの撤去費用を誰が負担するのか、という問題が発生します。また、海岸のごみには海藻や生物も絡みついているため、ごみを根こそぎ取り除くことで生態系を破壊する可能性があります。千里浜では毎年ボランティアによる清掃活動が行われていますが、しばらくすると漂着したごみによって元に戻ってしまうそうです。

楠部先生に海洋ごみ問題の解決方法を尋ねてみると、「今の生活を維持しながら解決することは難しいです。人々が海洋ごみについて関心を持つこと、海を守ろうと意識することが重要です。行動しようと思う人が増えて解決に向かってほしいです。」とおっしゃっていました。是非皆さんも、日々の生活を振り返ってみてはいかがでしょうか。





「芸能と工芸の伝統」

「ここ石川には古くからの伝統ある芸能や工芸がたくさんあります。しかし、それらについて知っているつもりでも案外知らないことが多かったりしますよね。そこで！少しでも石川の伝統に興味のあるそのあなた！百聞は一見に如かず、今回石川の伝統を体験できる施設を紹介いたします。興味ある方はぜひ足を運んでみてください。」

【加賀宝生流のお膝元で
能楽を体験しよう！】



江戸の昔から加賀藩では「空から謡が降ってくる」と言われるほど能楽が盛んでした。金沢能楽美術館では、毎週火曜日に現役能楽師による楽器体験を開催しています（予約不要）。もっと気軽に能の世界を体験してみたい人は、能楽美術館一階で、本物の能面と装束の着装体験をすることができます。

【加賀友禅を見て、描いて、
身にまとうよう！】



染め着物の最高峰と言われる加賀友禅。花鳥風月など伝統的なモチーフを、優美で写実的な図柄で表現する、石川を代表する伝統工芸のひとつです。長い修行と鍛錬で習得する技術ですが、兼六園近くの小將町にある「加賀友禅会館」では、簡単な手描きや型染めで友禅染を体験することができます。近くの兼六園を加賀友禅姿で散策することもできます。

【県内の伝統工芸の業種が一同に。
石川県立伝統産業工芸館】



ここに来れば石川県の風土が生み出し、師から弟子、親から子へと伝えられてきた技の伝承の業種と一気に出会えます。第1展示室、第2展示室すべて合わせての業種。土日祝日には、これらの分野から一業種の伝統工芸師が来館し、実演や体験、ワークショップなどを行っています。



『金沢の街並み』

皆さんは金沢市内を車で走ったことはありませんか？走ったことある人なら共感していただけだと思いますが、道が凄く狭いです……この原因は金沢の歴史にあります。

金沢は城下町として発展したため、防塞のために道が入り組んでいます。しかし他にも城下町として発展した都市はたくさんあります。では、なぜ金沢は他と比べて道が狭く複雑なのでしょう？

それは、戦時中に空襲で焼かれなかったためなのです。そのため、古い町並みと趣のある景観が残っているのです。道が入り組んでいて車が走りづらいというのは、裏を返せば昔からの街並みがきれいに保全されているという長所でもあるのです。



『金箔』



金沢といえば、もう1つ有名なのが金箔です。金沢における金箔の歴史についても調べてみました。金沢で金箔が作られ始めたのは、1533年、豊臣秀吉から命を受けた前田利家によるものだと言われています。また、幕府によって箔打ちの禁止令が出ていた間でも、加賀藩の細工所では隠れて打ち続けられていたために、伝統的な技術が途絶えることなく継承されてきたそうです。また、実は石川県の気候は金箔の製造に適しているのです。1年を通して降水量が多く天候の悪い石川県ですが、その湿度の高さが静電気を起こしやすく乾燥を嫌う金箔製造には最適なのです。そしてなんと、現在の日本の金箔は99%以上が金沢で作られています。

また、北陸地方は浄土真宗が広く信仰されていたこともあり、各家庭に仏壇が置かれていたことなども、金箔の需要が高かったことの一因だと言われています。現在でも金箔は金沢を象徴する伝統工芸の1つであり、金箔製造が400年以上続く伝統工芸であることが分かります。

「まちづくり」

高作社長は、輪島でのワイナリー経営を通じて「まったく新しいまちづくり」を目指していました。ハイディワイナリーを中核とした新たなまちづくり、私たちはその考えに惹かれ、ワイナリー訪問を決めました。

まちづくりを行うには、何か一つ中核となる産業が必要です。それがこのワイナリーであり、現在はワイン製造だけでなく、パン工房やレストラン、次いで宿泊施設など様々な分野へと運営を広げていっていました。また、その活動を同業者の方やSNS、メディアを通じて発信し、多くの人にビジネスを知ってもらうことで、また新たなつながりが生まれていました。それによって、全国から「働きたい」という方も集まり、ワイナリーを中核にした「まち」の形成に近づいていきました。さらに、輪島市という高齢化が進む土地において、雇用の確保は課題の一つでした。そこでシルバー人材センターを利用し、高齢の方々に働いてもらうことでワイナリーは働き手を得る、高齢の方々はお金ととも

自分のやることを得るという良質なサイクルを生み出しています。

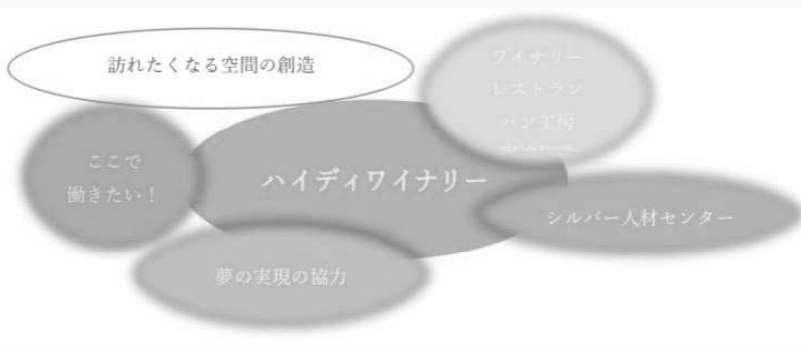
高作社長の思いは、まちづくりだけにはとどまっていません。県外から働きたいと来てくれた社員の「次の夢への協力」も行っていました。経営者という立場だけでなく、社員と対等な関係を築き、お互いがそれぞれの未来の目標に向かって進む空間づくりにも取り組まれていました。

ワイナリーを卒業した社員さんがまた新たな土地でビジネスを始め、そこで新たな出会いも、輪島のまちづくりへとつながっていくはずですが、新たなまちを作るうえで、その土地だけに縛られないということも大切だと学びました。

また、ワイナリーを「わざわざ訪れたくなる空間」とすることも高作社長が大切にしていることの一つでした。建物デザイン、自然との融合、ここでしか味わえないという特別感など様々なブランドを見出すことで魅力的な空間の創造を目指していました。

つまり、一つ中核となる産業

が存在することで、その産業が雇用を生み出し、人のつながりを作り、経済を動かし、街を活性化させることに繋がります。また、「そのまちにしかない」というブランドがより一層まちの魅力を引きだすキープポイントとなります。この一連の流れが私たちの活動の大きな指針となりました。



「高作正樹社長について」

【生い立ち】

神奈川県出身。東京電機大学卒業後、法律を学ぶために東京の大学院に進学。博士課程修了後、ワインづくりについて学ぶために、全国を1年間渡り歩く。その後、フランスのブルゴーニュ地方で1年間醸造について学ぶ。2013年に輪島市門前町で醸造所を開業し、3年後にレストランを開業。

【起業の経緯と人との関わり方】

大学院在学中にワイナリーに興味を持ち始める。フランスからの帰国後、親戚などと話す中で支援してくれる人がいることに気づき、企業が本格的になる。

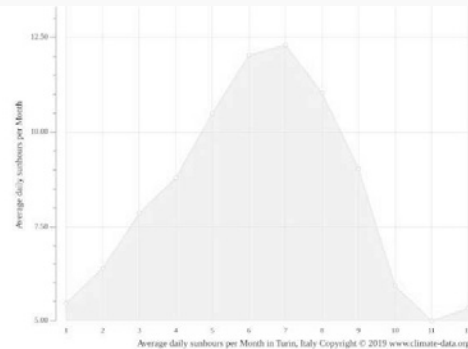
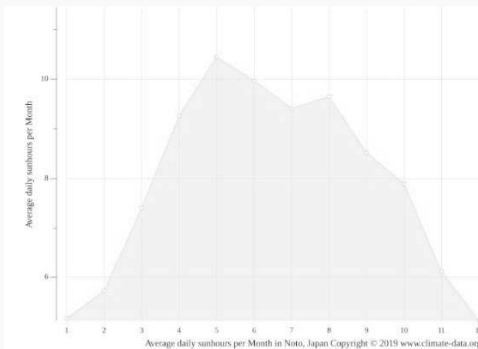
輪島でワインづくりを決めた理由として、まず東日本大震災の翌年だったため、被害の少ない日本海側であること、海のおいしい資源を利用できる地域であること、そして土壌分析の結果ワインづくりに適した土地であったことが挙げられる。

元々、人と関わることは得意ではなかったが、家庭教師の経験や、ワイナリー企業のために必要なことをこなしていくうえで人と話さざるを得ず、自然と人と話すようになっていく。

ワインづくり

へ能登とワイン

能登で獲れる海産物に合うようなワインを主に生産していて、ぶどう農園の隣でレストランも経営しています。食用ぶどうと違ってワイン用ぶどうは潮風にも強いいため、能登でも育てることが出来るそうです。また、ワインといえば、地中海など雨が少なく暖かいところで育てているイメージでしたが、ブドウ栽培に大切な10〜8月の日照時間は長い問題ないそうです。



左のグラフは、能登とトリノの1年間の平均日照時間の推移です。グラフの形が似ていることが分かりますね。

このように、5月に芽吹き始め9月にはすでに収穫しているため、日照時間の長い5〜8月と期間がぴったり一致していることがわかります。

(冬)	5月	6月	7月	8月	9月
	芽吹き	開花・結実	肥大・色づき	糖度上昇	完熟 ↓ 収穫
	剪定・苗植え				



へ課題点

2つのぶどう畑が車で20分ほどかかる距離に離れて作られていました。

能登半島は平地が少なく山がちなため、広い土地を一括で確保することが難しいです。たくさんある耕作放棄地を利用できれば広い土地を一括で利用できるが、耕作放棄地のもともとの所有者を調べるのに高額な費用が必要になります。国が管理するなどしてもっと簡単に放棄地を購入、借用できることが理想です。

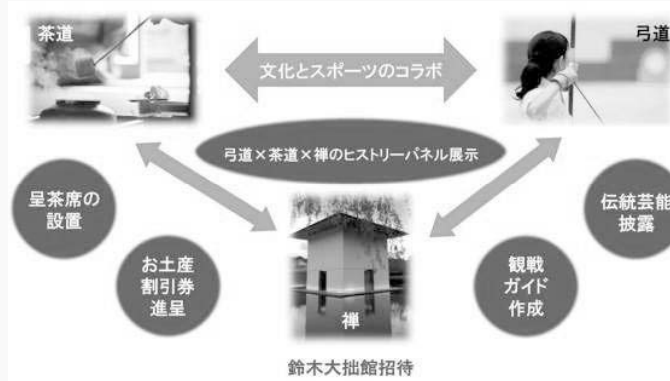
この解決には、法整備をするしかありませんが、コロナ対策やその他の経済対策に比べ優先順位が低いため、なかなか着手してもらえないそうです。

しかし、もし広い土地が手に入れば、機械化ができるため能登で農業をやる人が増えるだろうとおっしゃっていました。

【取り組み事例】

① 「文化×スポーツ」

第69回全日本弓道遠的選手権大会



② 「ライトファンづくり」

スポーツを頑張る人へのお弁当写真コンクール



<p>楽しんでもらう企画</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大会会場でのお茶席 ・伝統芸能披露 ・金管五重奏、横笛、琴の演奏 ・重ね捺しスタンプラリー など 	<p>地域・事業者・文化施設等との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・伝統芸能団体との連携 ・金沢箔みらい研究会の協力 ・スタッフによる夜の21世紀美術館クルーズ ・商業施設の協賛 など
<p>ライトファンづくり・普及活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スポーツをがんばる人へのお弁当写真コンクール ・観戦ガイドの作成 ・体験教室の開催 など 	<p>観光行動の分散化</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 観光スポット ○ スポーツ施設 ○ お勧めエリア
<p>前泊・後泊を促す取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夜の金沢21世紀美術館クルーズ ・かなざわ人のお稽古塾 (メイクアップ・水引・香道など) ・開催期間前後のイベント案内 など 	<p>その他の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・青年会議所メンバーへのAED講習会 ・金沢版BUDOツーリズムの商品化 (弓道×茶道×禅体験) ・事後アンケートと再訪調査 など

【インタビュー後の質疑応答】

Q：様々な世代の参加者を呼ぶために意識していらっしゃるようなことはありますか？

A：世代それぞれに興味を持っていただけるようなイベントを提供しています。例えば若者の多いイベントであれば「食」のイベントを組み合わせたり、ご高齢の方が多いイベントであれば「伝統芸能」のイベントを組み合わせたりしています。

Q：このような取り組みを周知するために銅のようなことを行っていますか。

A：以前はポスターやチラシを作り、近所に配ることで周知していましたが、最近はネット社会なのでSNS、主にInstagramやTwitterを活用して周知しています。

4. 所感

お話を聞いていて第一に、石川県にこんなにも楽しそうなイベントがたくさんあることに驚きました。スポーツと伝統楽器、スポーツとお母さんのお弁当など、関連があるようで組み合わせようとは思わなかったものが実際にイベント化されているところに魅力を感じました。人口増加させるために、まず人を呼び込み経済活性化を促すサイクルの中で、金沢文化スポーツコミッションは「また訪れたくなるイベント開催」に貢献されていることを知り、石川未来プロジェクトの活動としての一つの指針がみえたような気がしました。また、金沢文化スポーツコミッションの課長が、時代の変化に前向きなところが印象的でした。私たち学生に対してはやっていくことは何なのか、旅をするときに何を重視しているかなど質問していただきました。また、SNS活動にも積極的に、広告媒体としてのこれらの活動についてお話しください、普段趣味の一環としてしかSNSを使用していなかった自分にとつて、とても刺激になりました。

2021年4月から始動した石川未来プロジェクト。中間報告会にむけて活動を進めてきたものの、その後は何をしていけばいいのか誰も想像が付きませんでした。そこで、実際に企業訪問をし、今後の私たちの活動におけるヒントを頂きました。

1. 基本情報

[訪問先]

金沢市役所 金沢文化スポーツコミッション
桜田 みどり様

[日時]

2021年8月27日 金曜日

[訪問スケジュール]

9:00-10:30

市役所の新丁舎内会議室にてインタビュー

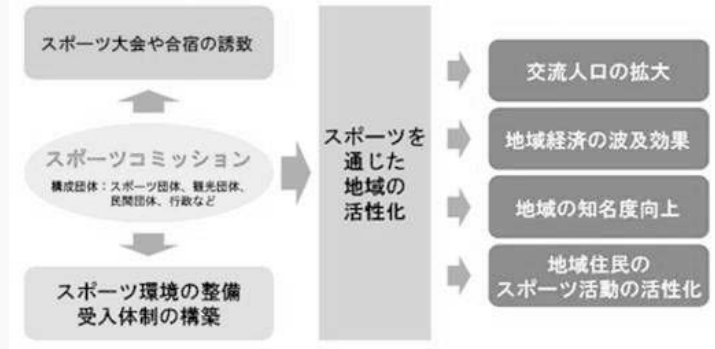
10:30-11:00

市役所内の金沢スポーツコミッション課にて
課長対談

2. 訪問目的

金沢文化スポーツコミッションでは、金沢の魅力や日本文化などをスポーツを通じて発信されています。その中で大事にしていることや、私たち若者世代に期待していることについて知り、夏休み以降の活動に役立てることを目的としています。

(スポーツコミッションとは、スポーツを通じた地域振興を目指す組織)



3. インタビュー内容

【金沢スポーツコミッションについて】

〈設立の経緯〉

- ・東京オリンピック・パラリンピック2020に向け、文化プログラムによる地域の個性・魅力形成
- ・歴史・伝統・学術・文化を磨き高める金沢のこれまでのまちづくりにスポーツの要素を加え、文化とスポーツ両面でのまちづくりを推進
- ・文化スポーツイベント等の戦略的誘致や受入支援、効果的なプロモーションを行う組織が必要 ⇒ 「金沢スポーツコミッション」を設立

〈コンセプト〉

『する人 観る人 支える人をバックアップ』

〈金沢文化スポーツコミッションの3本の柱〉

〈目的〉

- ①文化・スポーツを通じたシティプロモーションの推進
- ②文化・スポーツイベント等の誘致・開催による地域社会及び地域経済の活性化
- ③文化・スポーツの振興



文化・スポーツイベントの誘致推進

市のユニークな支援制度を活用し、地元団体と連携して全国大会・国際大会等を誘致

- 大会主催者：大会開催費補助金
- 地元団体（誘致団体）：奨励金
- 対象大会等：北陸3県を超える規模（国際大会、全国大会、中部大会等）

普及・交流の促進

- 誘致した大会等において地域のイベントになるよう参加者と市民をつなぐ
- ・トップアスリートと地元の子供たちとの交流
- ・観戦者支援（観戦ガイドブック作成など）
- ・競技団体の普及活動への協力（体験教室の開催支援など）

金沢BRANDの醸成・発信

- ・文化×スポーツのコラボで金沢ならではのおもてなし
- ・金沢ファンをつくり、周遊や再訪につなげる。
- ・金沢の魅力を発信することによっておこる地域活性化や経済波及効果の上昇

3つ目は、「医療機関や保育園などへの移動の簡易化」です。交通難民の中でもより移動が制限されているのは、高齢者であると考えます。特に医療機関への移動ができないことで家族の時間が制限されることはよくある光景ではないでしょうか。これらの単独での行動が制限される人々のための支援ができるまちであれば、世代を問わず、住みよいまちになっていくと考えます。

4つ目は、「フードツーリズムを核とした観光地化」です。石川県の魅力である食文化をさらに伸ばすべく、食で石川を楽しんでもらうというフードツーリズムの概念を取り入れます。さらには、食と歴史、食と自然など様々な組み合わせを作りだし、石川でしか味わえない、できないというブランド的要素にも力を入れると観光地としての魅力がさらにアップするのではないかと考えました。

ライドシェアとは

アプリ等を通じて、同じ目的に移動したい人を見つけ、相乗りで移動すること

カーシェアリングとは

アプリ等を通じて車の貸し出しを目的とし、ドライバーと車をマッチングさせること

～まちの実現によって見込まれる効果～

では、この4つの実現によってどんな効果が考えられるでしょうか。私たちはこれらそれぞれに別の効果を考えているわけではなく、組み合わせることでより高い効果が出ることを期待しています。取り組みにかけ算のイメージを持つことで、それぞれに繋がりがあがることを大切にしています。

では、この4つの取り組みによってまちにどのような効果が見込めるのでしょうか。下図をご覧ください。私たちは、図にあるような取り組みの効果をそれぞれが独立したものは考えていません。それらが組み合わせることでより高い効果を生み出すことを期待しています。例えるのであれば、掛け算のイメージです。ライドシェア等の普及によって交通難民が減少すると、今まで行動範囲が限られていた人々の活動範囲が拡大し、今まで買い物をしなかったような場所で買い物をして消費が増えるといったこと等が予測できます。

取り組み	効果	4本柱との関係
ライドシェア カーシェアリング	<ul style="list-style-type: none"> ・交通難民の減少 ・渋滞の緩和 ・活動範囲の拡大 ・観光方法の変化 	交通 経済
最先端技術の受け入れ	<ul style="list-style-type: none"> ・企業の誘致 ・雇用の拡大 ・U・Iターン就職の増加 ・まちの話題性 	経済
医療機関・保育園への移動の簡易化	<ul style="list-style-type: none"> ・交通難民の減少 ・活動範囲の拡大 ・健康寿命の延伸 ・購買意欲の増加 ・子育てがしやすいまち ・子どもを産みやすい、産みたくなるまち ・地元の人を離れさせない 	交通 社会福祉 経済
フードツーリズムでの観光地化	<ul style="list-style-type: none"> ・石川の食文化アピール ・地元民も訪れたい魅力の再発見 	食 経済

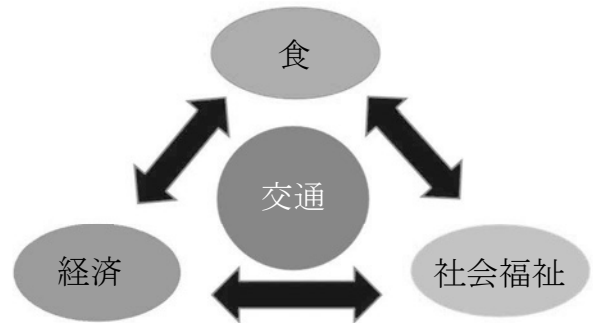
チーム「みどりのまち」最終提言

～提言を定めるまでの軌跡～

私たちは、中間発表にて「世代を問わず、住みよいまちかつ未来につながるまち」という共通の思いを定めました。そこからさらにチームの考えを深めるために、企業や自治体への取材、アンケートの実施を行い、それらの活動によって石川県の強みや魅力が見えた一方、同時に課題も浮き彫りになりました。

提言を行う上で私たちが大切にすることは、企業や自治体での取材で学んだ、何か1つ中核となるものを作ることです。中核を定めることで、それらを中心としたアイデアやさらなる発展が見込めることを知りました。そこで私たちのチームが中核として定めたのは「交通」です。アンケートの結果にあったように、交通機関の充実が石川県の大きな課題だといえます。一方で、社会人を対象とした「石川県に就職して良かったことは何か」という設問に対し、約半数の人が自家用車で通勤ができることと回答しました。つまり、一見課題点だと思われた交通機関の充実が、伸ばすべき石川県の魅力でもあるといえます。

また、私たちは提言を深めるために中核である「交通」を支える3本柱を考えました。それは、「食」・「経済」・「社会福祉」です。この3つはアンケートにおいて特に関心が高かった項目です。「食」は、アンケートにおいて石川県の最も大きな魅力であるとわかりました。また、観光地としての石川県の魅力を問う設問でも「食」が全体の約7割を占め、県民、観光客、どちらにとっても石川県の大きな魅力だといえます。一方、「経済」と「社会福祉」はともに石川県の課題であると考えられます。「経済」の安定・発展は暮らしにとって重要なものであるといえます。そのため、他の柱となる項目とともに成長していくことを目指します。「社会福祉」は、医療・子育て・高齢者福祉等を含ませました。これらも同様に暮らしにとって重要です。アンケートでもどれも関心がありました。交通機関の充実や食がどんなに魅力的であっても、経済や社会福祉の安定がなければ、まちを形成することは不可能です。これらの理由から私たちのチームは、「交通」を核とした「食」・「経済」・「社会福祉」の4本の柱で提言をすることを決めました。

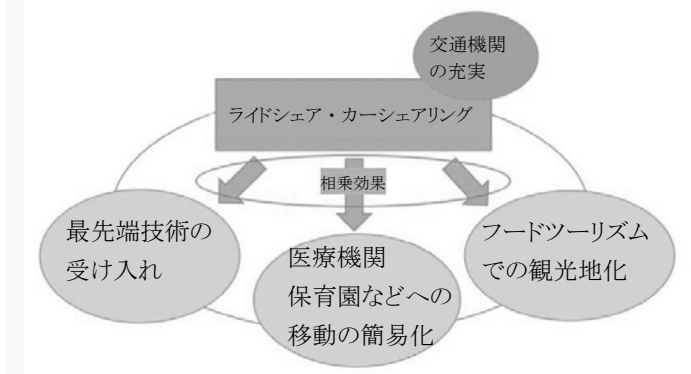
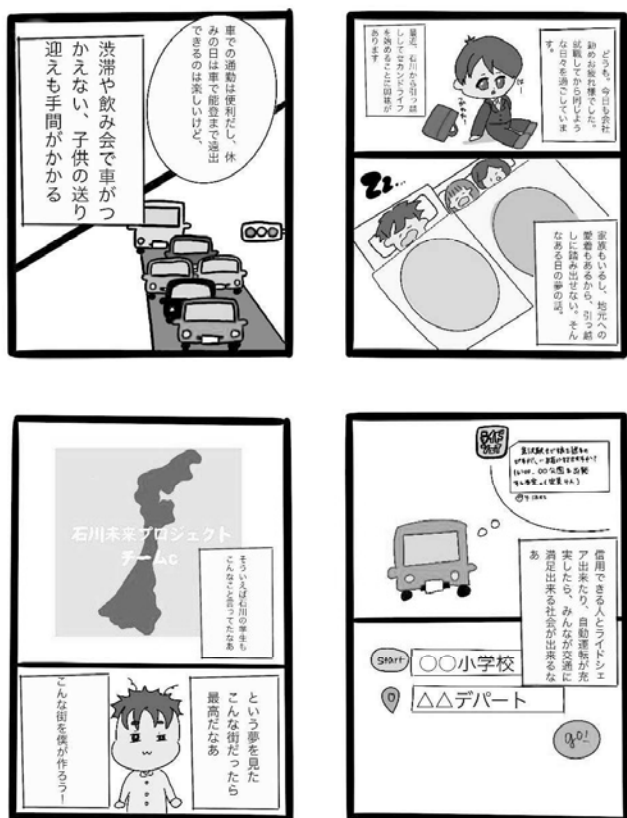


では、「交通」・「食」・「経済」・「社会福祉」の4本柱で形成されるまちとはどのようなものでしょうか。

まず、私たちが実現したいことは4つあります。

1つ目は「ライドシェア・カーシェアリングによる交通難民の減少・渋滞の緩和」です。交通機関を不便に感じていることにはどのような真意があるのかと考えてみると、大きく2つに分けられると思いました。1点目は、電車やバスなどの公共交通機関が少ないことです。これによって不便さを感じるのは、車を持っていない人や飲み会や出張等で車を一時的に使えない人だと考えられます。これに当たる人々がいわゆる交通難民です。2点目は渋滞です。石川県のように車を1人1台持つ車が移動の中心の地域では、渋滞が大きな問題となります。朝夕の通勤ラッシュや事故等で通行止めになるなどして渋滞が発生することは、人々にとって大きなストレスであるといえます。ライドシェアやカーシェアリングを取り入れることでこれらの問題の解決に繋がります。さらに、私たちのチームはこれを中心にした取り組みを検討しました。

2つ目は、「自動運転や電気自動車などの最先端技術を積極的に取り入れること」です。最先端技術を受け入れることで、企業の誘致につなげ、雇用を増やすことを目指します。また、自動運転は現在、様々な厳しい条件を定めたくて徐々に実現に向け動き出しています。実現において、責任問題や安全性などの多くの課題が残っているが、いち早くその波に乗ることでまち自体が注目を浴びることも繋がると考えます。さらに本プロジェクトでは、SDGsの考えを基盤としており、私たちのまちも持続可能であることを目指しています。そのため、最先端技術を取り入れることで環境への配慮や新たなエネルギー源の使用、雇用の拡大などを見込めるのではないかと考えました。



「交通」「食」「経済」「社会福祉」という、一見関連がなさそうな部分を組み合わせ、新たな発見、多くの相乗効果を見出す未来の持続可能なまち、「4つの支柱から成る、全ての世代が住みよい未来のまち」の創造。これが、私たちが約1年の活動を通して導き出した 2050 年にあるべき石川のまちです。

◀メンバー手作りの4コマ漫画

【コーディネーターの小椋先生より】

石川未来プロジェクトの特徴は、大学コンソーシアム石川加盟校（大学、短大、高専）の学生・生徒による所属の垣根を超えた活動であることです。2021 年度は前年度から続くコロナ禍のために社会全体が行動を制限され、会いたいひとに会えない、行きたい場所に行けない、という、いわば人びとが分断された状態だったと思います。石川未来プロジェクトも活動が制限されたなかでのスタートとなりました。

このような状況下でコーディネーターとして気をつけたことは、チームメンバー全員で活動内容と成果を共有し、ミーティングに欠席した場合でも議論に取り残されないようにするための場を作ることでした。そのために、日程調整ツール（スケコン）を使う、オンライン会議（zoom）は録画してあとで視聴できるようにする、対面のミーティングをオンラインとのハイブリッドで実施する、コミュニケーションツール（slack）で議論する、議論の内容をオンラインホワイトボード（miro）に記録する、などの手法を取り入れました。チーム「みどりのまち」のメンバーはこれらのデジタルツールにすぐに馴染んで、対面・オンラインに関わらず積極的に活動に参画してくれました。

チーム「みどりのまち」の活動では、メンバーそれぞれ自分たちがやりたいことを積極的に提案してくれました。メンバーの所属、専攻、学年がばらばらのため、非常に多彩なアイデアが出てきました。当初は、これをまとめるのは大変かも...と思っていたのですが、メンバー同士で議論を重ねるうちに、それらのアイデアは、大規模アンケート調査、企業および自治体へのインタビュー、雑誌のようなカラフルな報告書、として結実しました。

いま、この報告書のゲラ刷りを読んでいますが、石川の魅力と課題が浮き彫りになっている印象を受けます。第一に、石川は食・自然・文化などの魅力に満ちた土地であり、多くの人を惹きつけるコンテンツが豊富にあります。これらを人口増加に活用するための方策が求められます。第二に、体が健康である、自家用車を所有している、といった人は自由に移動することができたため、石川での暮らしを満喫する一方、健康に問題を抱えている人や交通弱者は行動の自由が制限されています。また、同じ石川県民であっても、地域間や世代間での分断が存在していることも読み取れます。この報告書では、テクノロジーの進歩および意識の変化によって人びとの行動様式が変容し、人びとの分断が解消した未来像が提示されています。

1 年間の活動を最後まで走りきってくれたチーム「みどりのまち」のメンバーのみなさん、ありがとうございました。これからみなさんが創ってくれる石川の未来に期待しています。

2022 年 1 月 9 日

編集発行： **UC↑** 公益社団法人 **大学コンソーシアム石川**

〒920-0962 金沢市広坂2丁目1番1号
(石川県政記念しいのき迎賓館 3階)

Tel : 076-223-1633 Fax : 076-223-1644

E-mail : info@ucon-i.jp

URL <http://www.ucon-i.jp>

発行年月：2022年2月

本成果報告書は、公益社団法人大学コンソーシアム石川が実施した
令和3年度石川未来プロジェクト事業の取組みを取りまとめたものです